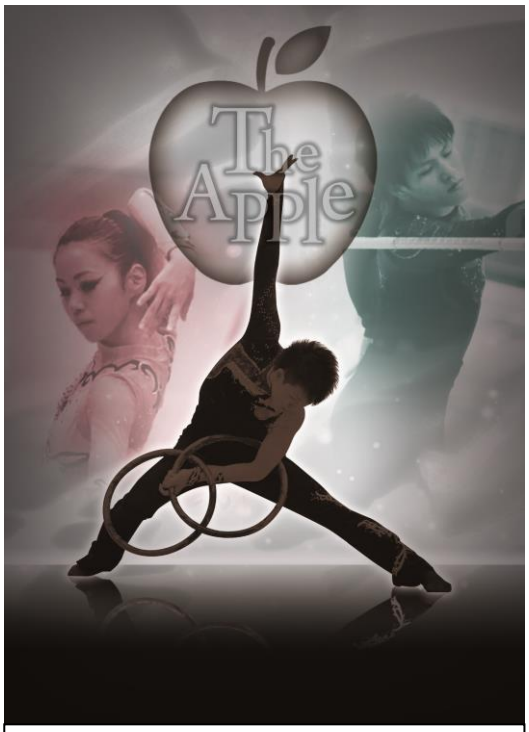
「男子新体操の社会学」に向けて

—観客の語りから見る男子新体操界—

秦美香子・野田光太郎
（花園大学文学部）

はじめに（秦）

新体操といえば女子新体操が有名だが、日本などいくつかの国・地域では、男子新体操という競技も行われている。男子新体操はアクロバティックで大きな動作と繊細な所作を組み合わせた演技が特徴的で、競技ルールや、個人競技に使用される手具[1]は女子新体操と異なる。近代スポーツ[2]として制度化され組織化されているが、創造性や美を志向する側面も大いにある。スポーツというよりも身体を用いた表現手法の一種としてイメージしていただく方が分かりやすいかもしれない[3]。



（図1）2014年花園大学新体操部発表会のポスター。中央の人物の静止したポーズが、とても男子新体操らしい（ように思う）。

本誌は『女子学研究』であるにもかかわらず、本稿が男子新体操を主題とした理由を、ここで述べておきたい。

本節の筆者は、勤務先で開催された小規模の競技会（たぶん。何の競技会だったか覚えていない）を見物したことがある。他の教員から「学生に対する見る目が変わるから」ぜひ観に行くよう薦められたからである。着任したばかりで、男子新体操のことはまるで知らなかったので、器械体操の器械無しバージョンのようなものかと想像した。そして、週末なのに面倒だなぁと思いながら出かけた。結果、確かに見る目は変わったのだが、そのとき会場には関係者以外の観客は全然いなかった。学内の教職員も一般客もいないように見えたし、そもそも、誘ってくれた教員すら来ていなかった。まあ、マイナー競技だろうからそんなものか、と思った。

それから数年経って、ちょっとした事情により、かつて日本体操協会が発行していた新体操機関誌『RG』のバックナンバーを読む機会があった。ぱらぱらと全体を眺めていて、あるページに掲載された写真を見たとき、衝撃を受けた。なんと、「男子新体操を見るために開場待ちをする女性たちの長蛇の列」みたいなものが写っていたのである。そんなジャニーズアイドルみたいな要素が、あのマイナーな男子新体操にあったとは…[4]。

男子新体操を見たくて開場待ちをしていたという女性たちは、関係者でもないのに、いったいどうやってこの競技の存在を知り、興味をひかれるようになったのだろう。なにがおもしろくて、こんなマイナー競技（競

---

1 女子はリボン・フープ・ボール・クラブ、男子はスティック・リング・ロープ・クラブで、クラブは男女ともにある。ただし、材質や形状などは若干異なる。

2 「スポーツ」と「体操」を区別する場合もあるが、本稿ではその区別は重要でないため、体操もスポーツの一種とした。

3 新体操のスポーツ競技としての側面と芸術としての側面をめぐる議論は、渡部（2009）、浦谷（2014）など。

4 男子新体操を馬鹿にしているみたいに聞こえるかもしれないが、筆者（秦）は、学生や指導者の日々の努力や、その結果としてかれらが獲得した堅実な技能と自由な発想を心から尊敬している。

技人口は約2,000人らしい）を追いかけているのだろう。男子新体操を追いかける楽しみや困難は、サッカーファンや野球ファンのそれとは全く異なるのではないか。競技会や演技会[5]の情報を集めることすら一苦労だろうし、演技の良さをわかちあえる同好の士も見つけにくいかもしれない。

想像していると、直接話を聞いてみたくなってきたので、Twitterで男子新体操に関するコメントを発信しておられる方のひとりにコンタクトを取ってみた。本学では毎年12月に新体操部の発表会を開催しているので（図１はその発表会のポスターデザインである）、もしそれに来られるなら、お話しする時間を持ってもらえるかもしれないと思ったのだ。その方は、快く了解してくださっただけでなく、他のお知り合いの方々にも声をかけてくださり、５名の方と話が出来る機会を作ってくださった。そんなわけで、男子新体操女子（と男子新体操男子）に座談会を開催していただけることになった。

ということで本稿は、いずれ改めてまとめたい「男子新体操の社会学」を夢見て、ひとまずはファンの方々に集まっていただいた座談会を記録したものである。詳細な分析結果と考察は今後改めて公開する。

なお、本節の筆者は男子新体操に関する知識がほぼ皆無であるため、考察は男子新体操に少し詳しい野田光太郎と共同で行った。本節に限っては秦のみに文責があるが、以下は共同著作である。

1　座談会の概要

座談会は2014年12月13日の夕方（16:45頃から）行われた。参加者は、男子新体操を好む主に30～50代前半の男女（女性４名：Ａ～Ｃさん、Ｅさん、男性１名：Ｄさん）で、会社員など仕事を持っている方ばかりだった。参加者の年齢は、あらかじめターゲットをしぼったわけでなく、前述の経緯で紹介していただいた方が結果的に全員大人だった、というだけである。場所は大学の個人研究室で、和やかな雰囲気で行われた。当初は１時間程度、とお願いしていたが、皆さんのお話につい聞き入ってしまい、終了したのは開始から２時間後であった。筆者のうち野田は座談会には陪席していない。

以下、いくつかお話を引用しているが、文字起こししたデータを読みやすくするために語尾などを一部変更した（変更によって文意がずれたりしていないことは、発言者に確認済み）。トピックの順番は原稿をまとめるにあたり再構成したが、各節の内部では会話の順番を変更するなどはしていない。なお、皆さんのお話の中でも、考察の部分でも、「一般のファン」という言い方が一部ある。これは、（元／現役）選手・指導者・選手の保護者・学校（所属団体）関係者以外の観客、という意味で使用している。

2　男子新体操との出会い

まずは、どうやってこの競技を知ったのかを皆さんに順番に尋ねた。Ａさんは、男子新体操の存在はテレビで偶然見て知ったようだが、興味を持ったきっかけは「マッスルミュージカル」に出演していた男子新体操選手であったという。Ａさんは現在でも、元男子新体操選手が出演する舞台やイベントを優先的に観ていると言われていた。

Ａ：どこからっていうのが私の中ではけっこうあいまいなんですけど、男子新体操自体を知ったのは、テレビで、今はもうなくなっちゃったんですけど、「偉い人列伝」みたいな、珍プレー好プレーみたいなのをやっていたときに、男子新体操の選手が紹介されたことがあって、それで。でもそのときはそれで終わっちゃって、そのあと、「筋肉番付」っていう番組から派生した「マッスルミュージカル」に男子新体操の子も出る、っていう話を聞いて。元はその子を見に行ったわけじゃないんですよ。観に行くうちに、その子にハマった。で、その人がやっていた競技だから、ちょっと調べてみようって。でも、大会に行こうとかは全然思ってなくて、ミュージカルで観られればいいやと思っていて。

大会見に行くきっかけになったのが、そのあとに（マッスルミュージカルに）入った、Ｈ大学ＯＢのＳ君と、

[5] 演技が点数化され順位が決められる競技会とは異なり、演技を発表するためのイベントが各地で開催されている。

K大学OBのS君と、もう一人F大学OBのTさん、っていう3人。（全日本選手権大会の）3日目（＝決勝）だったらきっと（3人以外にも）上手い人ばっかり出ている、って思って行ってみた。そこで見たO君とK君（当時高校生）にハマったのがきっかけで、その子が大学卒業するまでおっかけよう、っていうのが今も続いている。そこに行ってなかったら、今の状態には、たぶんなってない。そんな感じで、大会行くようになってからは7～8年。

Bさんは、フィギュアスケートや女子の新体操など様々な競技に詳しく、コンサートや舞台も頻繁に観に行かれている方であった。新体操とフィギュアスケートをメインにした雑誌なども読まれていたため、かなり昔から男子新体操の存在も知ってはいたが、関心を持ったのはドラマをきっかけに全日本選手権を見に行ってみたときだったようだ。

B：2010年に、TBSのドラマで「タンブリング」っていう男子新体操を舞台にしたドラマがあって、あれ春だったんですけど、その年の全日本が、ちょっとチケット代も安いし、ふだんフィギュアスケート見るんですけど、その試合とかぶってなかったんです。で、代々木だから、じゃあ見に行ってみよう、って。そのとき団体を観に行って、でも、見れば見るほどハマるのは分かっていた。（だから）ハマらないように、行かないようにしていたんですよ。フィギュアスケートとか宝塚とかを見ていたので、これ以上増えると困るので。でもその後、2年前の5月に、高校生以下の子がやるユースっていう試合があって、その決勝で、今大学生の、H大学だとH君とか、あとC大学のU君とか、あとA大学のN君とかを見てしまって、そこで始まってしまったの。あ～あ、ハマっちゃった、ていう（笑）。わたしは（選手ではなく）作品にハマるので、H君のクラブの作品にハマっちゃったんですけど。で結局、（いろいろ好きなもののひとつ）に、男子新体操が加わってしまって。

BさんのCさんは、Bさん同様フィギュアスケートのファンであったが、やはりテレビで男子新体操を観たことで興味を持ったようである。さらに、Bさんが演技の動画をいろいろ教えてくれたことがCさんの知識を増やし、改めてテレビで接触することで「ハマって」しまったようだ。

C：自分が男子新体操を知ったのは、ちょっと定かではないですけど、やっぱりテレビで。高校を取り上げた番組で、たぶん、Ko高校と、Ka高校のどっちが勝つか、みたいな感じの番組だったと思うんですけど。で、見ているうちに、A 高校っていうのが出てきて、あ、ここ好きかなって、きれいな、表現力のある学校もあるんだなって思って。でも会場に足を運ぶというのは、わたしが住んでいる場所が地方なので（行けなかった）。（かわりに、）Bさんが普及活動というか、いろんな大会の映像を見せてくださって、それで、あ、こんな選手もいるんだ、みたいな感じで観るようになったんです。

あきらかにハマってしまったのは、それもやっぱりテレビで、NHKで「Rの法則」っていう番組で、2012年くらいに、「部活バトル」っていうので（I高校が）予選で優勝したんですけど、その中の1回を観たときに。YouTubeで観ていて、I高校は好きだったんですけど、実際に選手たちに焦点があたったその番組を観てしまったら、もう本当に、落ちてしまって。本当に好きで、ビデオの中でもI高校だけ観て、他の選手はとばして全然観てなくて、ぐらいの状態で。でも、自分より先にI高校のファンになっていた友人に、「I高校だけ観てちゃだめだよ」って叱られて、一生懸命他の選手とか学校も観るようにして、あーこんな選手もいるんだ、こんな学校もいるんだ、って観るようになったんです。けどやっぱり、どうもI高校しか好きじゃない[6]、みたいな（笑）。

男性であるDさんも、きっかけは他の方と同様で、メディアをきっかけに競技会を観に行き、そこで特定の選手に興味を持つ、という流れである。

D：最初はね、やっぱりテレビでしたね。6年ぐらい前かな、「笑ってコラえて」が、たまたまテレビに流れて。それ観て感じたのは、すごく動きが大きくて、これだけ変化が激しいスポーツっていうか演技っていうのを見たことがない、と。これこそ究極の演技じゃないのって思ったのが、きっかけかな。で、そのとき、どっかで

6 とはいえ、他にも応援している学校や選手がおられるとのことであった。「しか」というのは言葉通りの意味ではなく、特別好きなのがこの団体だ、というお気持ちのようである。

やってるとこないか、と思って探したのが、最後の大分国体なんだよね[7]。で、大分見に行って、で、そっからもう、ずっと見ている。僕はこだわって、新体操しか見てないですね。で、最初の頃はね、好きな選手とかチームとかいて、Ko 高校のＨ君とか、あと、Ka 高校のＴ君とかが、僕にとってのヒーローだった。

このように、他の女性の座談会参加者たちと同様、Ｄさんも当初は特定の選手を「ヒーロー」として応援していたが、男子新体操を観に行くうちに、特定の団体などではなく競技自体のファンになろう、と思われるようになったという。

Ｄ：テレビでも放映されているぐらいの競技なわけだから、一般のファンって、いると思ったんですよ、もっと。大会に行くと、誰かがラッパ吹いてたりとか、私設応援団とかが何かやってるのかな～って思ったら、どこ行ってもいないんだよね（笑）。少なくともこの４～５年見ていて、いわゆる一般のファンっていう人ね、見たことがあんまりない。

今はね、だいたいどこ行ってもだいたいこんだけ（５～６人）のメンバーは集まるようになったものだから、ちょっと心おだやかにはなってきているんだけど。大会見に行っても、おれたちビデオ撮れないものだから[8]、本当に苦しくなるんですよね。感動したっていう記憶だけは残っているんだけど、何を見たのかが、全然覚えていられない。ほとんど記憶喪失の状態なんですよ。僕は、何かに感動したはずなんだけども、何も覚えてない。もうね、すごい辛いんですよ（笑）。大会が終われば、選手はバーッと去っていっちゃうし、気持ちだけ興奮しているし、取り残された感もあるしね。もう本当にね、さびしくてつらくて苦しくて（笑）、っていうのが、ずっとあった。

そうこうしているうちに、ずっと大会に行くし、で、自分はだいたい子育ても終わってからファンになったものだから、けっこう時間が自由になったところがあったもんで、じゃあ、せっかくだから僕に何かできることないのかなと思って、情報発信しようと思って、つぶやいていたんですよ。

最初は僕にも好きな選手とかがいたんだけど、これだけ一般のファンがいないということが分かってきたので、僕は新体操のファンになろう、と思って。なるべくどこ、そこ、っていうのは言わないように、あんまり持たないようにして、いま意地になって全部観てるって感じかな。だから、自分の大事なもの（選手や学校）を見つけていろいろ見る、っていう見方もあるけど、僕は、こだわって、全部の新体操を見る、みたいな形になった。

Ｄさんが男子新体操に「ハマって」いく様子は、Ｄさんのご家族であるＥさんの話でさらに詳しく語られた。Ｅさんは、この座談会に参加してくださった他の方々とは異なり、Ｄさんの影響で興味を持つようになった。競技を知ったのはＤさんと同じテレビ番組を通してであったはずだが、実は番組を観ていたかどうかすら、はっきり記憶していない、と言われていた。当初はＤさんが男子新体操を好んで観に行くことを不思議に感じていたようである。

Ｅ：わたしも観ていたはずなんですけど、わたしは全然ハマらなくって。大分国体とかは、（Ｄさんは）娘を連れて行ってたんですよ。娘と二人で、大分行ったり岡山行ったり千葉行ったり。あたしは、仕事も忙しかったし、なんかＤさん、どうしちゃったのかなって（笑）。本当に、どうしちゃったのかなっていう気持ちでいました。かろうじて、娘が「すごいかっこいいんだよー」とかって言ってたから、あ、そうなんだ、と思って、ちょっとそこが救いではあったんですけども。

Ｄ：意外といるよ、オヤジの新体操ファンって（笑）。

Ｅ：そんなにいいのかなって思って。で、その翌年の 2009 年の、全日本の団体だけ、なんか誘ってくれたから、そんなにいいなら一度ぐらい見に行ってみようかなと思って。その頃わたしはお笑いが好きで、しずるとかの青春コントが好きだったんですよ。代々木だったら新宿が近いから、ルミネ新宿に行けたらしずるが見れ

---

7 男子新体操は 2008 年の大分国体を最後に休止種目になっている。

8 関係者以外の観客は撮影禁止という競技会も多い。

ると思って、どっちかっていうとしずるメインで、ま、ついでに新体操も見ましょうかね、ぐらいな気持ちでいて。それでハマっちゃった、っていう感じです。あのとき団体の予選の試技順一番がＨ大学だったんですよね。だから、すごい印象に残っている。あの、龍をかたどったレオタードとともに。で、それでハマって、それからは、Dさんが行くっていうときは、じゃあ一緒に行くって言って、新体操見るついでに旅行もしたりとかして、一緒に見に行くようになりました。ちょうど子育ても手が離れたときで、子どもたちも快く、送り出してくれて。

わたしは、新体操ももちろん素晴らしいし、素敵と思っているんですけど、その後の、こういう、ファンの皆さんとお話ししたりとかっていうのも楽しくて、それで観に行ってるかなっていう感じもちょっとあります。

男子新体操に興味を持ったきっかけをめぐる語りから見えてくることは、まずマスメディアの役割が語られる、というパターンの存在である。今回話をうかがった方々は、おおむね、マスメディアというきっかけ→全体としての男子新体操への興味→個人選手を好きになる・全体としての男子新体操を好きになる、という流れで、焦点をしぼっていくと同時に関心の度合いを深めていく、という似たような経路をたどっていた。

男子新体操がマスメディアで取り上げられる機会は多くない。テレビなどで紹介されることがあっても、珍しい競技としてごく短い時間で放送される程度で、競技会がテレビ放送されるなどということもほとんどないように思われる。また、マスメディアが必ずしも競技への誘因にならないことは、ＡさんやＥさんの話に明確にあらわれている。当然ながら、実際にはマスメディアによって興味を引かれる人よりも、興味を全く引かれない人の方が多いに違いない。それでも、マスメディア、とくにテレビが、座談会参加者の皆さんにとって、競技との出会いの有効で強力な方法となっていることは興味深い。

3　観客としてのふるまい

男子新体操は、全日本選手権大会やインカレ、全国高校選抜大会などの競技会と、学校・クラブチーム・地域などの単位で開催される演技会が、年間を通して様々な場所で実施されている。それらの競技会や演技会に、皆さんはどのようにして行かれているのかを質問した。Ｅさんは前述のとおり、他の人と話したりすることも、競技会などを観に行く際の楽しみのひとつだと言われていた。しかしそういう楽しみは競技会に行った際の副産物のようなものであり、それ自体が目的になっているわけではないようだ。

秦：みんなで待ち合わせとかするんですか？

Ｂ：いやいや、現地（集合）です。

Ｄ：会場内（で会う）ぐらいだよね。

Ｂ：みんな、勝手にチケット取って、「ああ！（※偶然会う）」みたいな感じ。

Ｄ：みんな、自立してるもん。ここらへんの人たちって。

秦：「一緒に行こう！」みたいな感じじゃなくって？

Ｂ：別の友達と何か好きなものを見に行くときでも（同じ）。

Ａ：いや、ここ（マッスルミュージカル）もそうです。

Ｄ：たぶんね、一人でいるのが怖くないんですよ、みんな。つるんでなくても平気な人たちなんだよ。

Ｂ：だって、誰か一緒に・・・じゃあ、行けないもの。

以上のとおり、それぞれ単独で会場に足を運び、偶然互いを見かけたら話を楽しむ、というのが基本のようだが、しかしそれは、舞台やショーを観に行くということと全く同じでもない。たとえば、男性ファンには特有の困難がつきまとう。

Ｄ：なんで男が男子見に行かないかんの、ってしょっちゅう言われるもんね。いやおまえ、プロレスとか相撲とか観に行くだろう？って言ってんだけどさ。

Ｄさんの言葉通り、「男が男を見る」ことは、プロレスでも相撲でもサッカーでも、ごく普通に行われている

ことである。しかしその対象が新体操になると、男が観察者になることが抵抗をもって受け止められることもあるようだ。Dさんが男子新体操に関心を持つようになった際にも、Eさんは「どうしちゃったのかな」と思った、と語っていた。このくだりは具体的には引用を避けたが、サッカー選手に関心を持つのとは異なり、男子新体操選手に関心を持つことは、同性愛的な視線が含まれているのではないかと憶測されることがあるらしい、ということが、皆さんの語りの内容からは感じられた[9]。

それだけでなく、異性愛的なまなざしが一方的に疑われることもあるようだ。これは、具体的に記述することは避けるが、女子新体操選手を対象にした一般客による撮影などにまつわる実際のトラブルから、新体操やフィギュアスケートなどを単独で観に来る男性客が警戒されるようになったことに関係している。

D：（他の観客の目線を遮るように、女子選手を撮影するために一般客が大型のカメラを構えていたことがあり、）そんなことしたら皆ね、腹立つよね、と思って。だから僕は男子側に座って、女子側に背を向けて、僕は男子しか見てません！っていって見てる。だから、いまだに女子のことは全然わからない（笑）。

全日本選手権大会では、観客席（指定席）は、両方のフロアは見えるものの「男子側」と「女子側」が区別されて販売されている。そのため、男子側にいる観客は男子新体操を見に来たのだな、と分かるのだが、女子新体操の観客の方が多いために、チケットが取れずに不本意ながら男子側の客席から女子のフロアを見る、という人もいるようだ。そういう事情から、男子側の席を取っていても、女子新体操を見に来たわけではない、というパフォーマンスを取る必要が生じるわけである。つまり、新体操を観に来る男性客は、ほんとうは同じ会場で行われている女子選手がお目当てなのに違いない、と見られてしまう、ということである。

そういった「場の空気」に関わること以外で一般ファンがしばしば感じているのは、関係者以外が競技会を観に来るとは運営側が必ずしも想定していない、という問題である。

A：間違いなく、いちばん最初に会場に行って、席についていると、「どなたの保護者ですか？」とか「どこの学校の関係者ですか？」っていう質問が、一発目に来ますね。全然違います、って答える心苦しさ（笑）。

B：フィギュアスケートも新体操も、何かちょっとお願いごととかがあって受付に行くと、「どちらの学校の方ですか？」とかって聞かれるんです。一般の人たちが来るっていう前提が、内部の人たちに、ない。

D：ないね。そうそう。沖縄総体で、僕が名前知られたの、そこでしたね。嵐になっちゃって、そのとき狭いところにみんな並んでいたものだから、場所取り（名前を言って順番をリスト化）しようってことになって、各団体が、順番に宣言したんですよ。「秋田の女子です」、とか「青森の男子です」とか。で、僕のところに来て、「名古屋から来た一般なんだけど」って言ったら、そこでみんながね、「え？なんで？何者なんだこいつは」ってなって、覚えてもらった。「沖縄まで来るんだ」って（笑）。

Bさんが「フィギュアスケートも」と言われているとおり、これは男子新体操の特徴というよりも、マイナー競技の試合やマイナーな趣味の集まりでは常に見られる事象かもしれない（とはいえ、他競技との比較は本稿が扱える範囲を超えているので、この点は不明である）。

B：あの、明らかに一般の人あたしだけだ、っていうところに座る、あのいたたまれなさね…

（一同、笑）

A：わかる。ほんとわかります（笑）。こないだ、ひさびさに体験しましたよ。明らかに学校ごとに応援席が分かれちゃってるんで、一般が座るところはどこですか？みたいな感じ（笑）隅の方でちょこーんと（笑）

D：（学校の）県別に席が分かれているから（笑）ここは愛知県、ここは岐阜県とかさ。おれらどこに座ったらいいんだよ、みたいなさ（笑）

---

9 座談会参加者の皆さんがそのように思われている、という意味ではなく、そのような言われ方をする、という話が出ていたのである。今回の座談会では分からなかったが、女性の観客が男子新体操を観ることも、異性愛の文脈で第三者に語られることがあるかもしれない。その意味では、美的な関心が性愛的関心として読み替えられてしまう、という事象は、必ずしも男性の観客だけに生じる問題ではない可能性がある。

Ａ：昔の全日本も、そんな感じでしたよ。今でこそ指定席になったんですけど、わたしが観に行き始めたときなんて、入場券を買う案内もないし、っていうか無料だったんですけどそのときは、案内もなかったんで、「えーっと」と思いながらそおーっと入って、このへん座ってても大丈夫なのかなあ？って。
Ｄ：みなさん、粗雑な扱いに慣れているんだよね（笑）みんな自分で（様子を窺って）ね、かつ気を遣い（笑）
Ａ：選手席とかも分かれてなくって、正面に普通に選手さんがバーンと座ってたりとかするから、「ここはとりあえず止めておこう」みたいな形で、様子を見ながら「あ、このへんは大丈夫そうだ」って思って席に座るっていう（笑）今でこそ指定席なんでいいですけど、あの指定席も良し悪しで、呉越同舟になっちゃうのがどうなのかなって。いろんなチームの保護者が。

観客席が学校単位で事前に割り振られるということはないものの、学校ごとに保護者や関係者がゆるやかに凝集して座席につくといったことが自然に起こるため、どこにも所属のない一般の観客が観客席での居場所を見付けにくい、と感じられる場合があるようだ。かといって、関係者が混在して座っている場合にも、また別の問題が生じると見られていることがわかる。本稿では具体的な引用を省略するが、座談会参加者の皆さんからは、保護者の応援の仕方に関する意見もさまざまに語られた。たとえば、好きな選手や団体があっても、どの選手や団体の演技も応援をしながら観ている一般ファンの人々にとって、自身の子である選手や、その所属団体だけを応援する（他の選手や団体が演技している時間を移動やおしゃべりの時間にあてる）保護者の姿は、マナー違反として映るようだった。

とりわけ競技会という空間に対する、選手自身、その保護者や関係者、一般ファンの捉え方の間には、齟齬があるように思われる。この問題については、選手や保護者を対象としたインタビューなどを行ったうえで、改めて検討したい。

Ｂさんはフィギュアスケートを観ることとの違いについて、以下のようにも述べられていた。
Ｂ：そこがね。フィギュアスケートの話になって悪いんですけど、一番の違いで。フィギュアスケートって、誰誰さんのファン、なんですよ。だからたとえば、応援バナーも、全部個人名で作るわけで、逆に言うと学校名とかで出さないんですけど、新体操って体操と一緒だから、所属名のバナーしか出ないわけで、その所属の応援でしかないわけですよね。そこの違いをすごく感じる。

以上の語りからは、一般ファンである座談会参加者の皆さんが、座席・保護者などの態度・応援スタイルなどが基本的には学校単位で構成されているとして男子新体操を観戦（観賞）する場を認識していること、そして、その場に分け入る存在として自身を位置付けられていることがうかがえる。そのようにして場に参入する際には、場のメインプレイヤーである選手、指導者、保護者などの「関係者」と全く関わらないというわけにはいかないかもしれない。では、その相互行為とは、どのようなものだろうか。

4　選手、指導者、保護者との関わり

男子新体操をいつどこで観られるかに関する情報は、必ずしも整理されて公開されているわけではない。競技会などは主催団体のウェブサイトなどで公式に発信されるが、学校や新体操のクラブチームが単独で開催する演技会や発表会、あるいは選手や団体チームがゲスト出演する舞台やイベントなどは、各学校・団体の独自サイトや SNS のみで案内が出るか、直前まで全く案内が出ないものも多い。そのため、競技会以外のイベントに出かけたり、応援している選手が出演する舞台などを見ようと思う場合には、選手や指導者に直接尋ねるのが最も確実な手段と思われているようだ。
Ｂ：男子新体操の指導者の方って、数少ない一般のファンを大切にしてくださるんですよね。
Ｄ：そうだねえ。
Ｂ：いろいろ親切に教えてくださったりとか、みなさんされるので。でもだから逆に、（座談会に参加されている人は、）こっちは勘違いしちゃいけないって思ったりしている人たちだと思うんですよ。そこで勘違いする人も、たぶんそのうち…いや、いるな（笑）たとえば今、試合の時間とかね、Twitter とかで試合何時からですか、

とか聞く人がいるんですけど、そんなのちゃんとオフィシャルなところに載っているわけですよ。自分で見ろよって思うんですよね、わたしは。自分でいくら調べても分からないような小さい試合とか発表会のときには、聞いても仕方ないかなって思うけど、なんにも調べないで、何時ですか？いつですか？どこですか？みたいなのを軽くコーチの方とかに聞く方がネット上でいるんですけど、向こうだって忙しいんだから…って思うんですよね。どうしても分からないときは聞きますけど。

Ｂさん以外の方も、直接尋ねると迷惑がかかるように思うが、直接聞かなければ分からない場合は仕方ない、という気持ちでおられるようだった。ここから分かるように、男子新体操は「する者」と「観る者」の距離が比較的近い界として認識されているようだ。

Ａ：わたしがハマったばっかりの頃（７～８年前）って、関係者しかいないっていう状況だったんで、挨拶に来る選手をつかまえてお話ししていいものかどうかもわからない、っていう状況だったんで、（好きな選手とは現役時代には）話をしたことが一切なかったんですよ。で、舞台に行くようになって、で、出待ちとかして、「実は現役の高校のときから好きで…」って話をすると、「えー、そんな頃からだったんですか！？」とか「もっと早いこと声かけてくれれば良かったのに」とか言われて。いやいや待って、そういう状況ではなかったから、ていう（笑）

Ａさんは、会場に関係者しかおらず、一般ファンの来場がほぼ想定されていなかった頃には、選手に声をかけにくい雰囲気だったと感じている。この発言からは、男子新体操界のサイズの問題、つまり、メジャー競技ではないが保護者など以外の人々が競技会や演技会を見に来ることもある、という手ごろなサイズ感によって、選手との距離が快適なものになった、と考えておられる様子がうかがえる。

また、Ａさんの言葉にはあらわれていないが、ここ７～８年間に起こった変化には競技人口の増加以上にSNSの普及が挙げられるだろう。過去には選手と観客の間で交流が可能になるのが競技会などの場に限定されていたのに対し、SNSのアカウントを持つことが多くの人にとって当たり前になった近年では、選手や指導者などのアカウントをフォローし、対面で会うより先にオンラインで交流する一般のファンも増えている。選手なども、全く知らない観客からいきなり声をかけられるよりも、SNSを介して存在を認識している観客から声をかけられる方が、驚きや警戒心をあまり持たずに対応することができる。それが、Ａさんによって語られたような、選手と観客の交流が比較的容易になった背景にあると考えられる。

つまり、SNSによって相互に存在を認識する程度のゆるやかなつながりを持ち、また対面での交流が可能な競技会の場でもある程度は一般のファンが来ている（ことが選手たちにも知られている）、という条件がある中で、選手と一般の観客の間で対話が生まれるようになった、ということではないだろうか。

かといって、ファンが多くなりすぎ、メジャーになりすぎると、こうした直接のやりとりが不可能になることも容易に想像される。実際、プロとして活動する男子新体操グループの、現役選手時代からのファンであるＡさんは、プロデビューした後でファンになった人々とのふるまい方の違いに戸惑うようであった。

Ａ：（プロになってからファンになった人にとっては、元選手たちは）タレントなんで、わたしが（元選手に）「あー、Ｔ君～」なんて行くと、ものすごい圧力がかかってきます（笑）

Ｄ：えー！　そうなんだ。そんなのがあるの。

Ａ：選手にはいないですよね。辞めて、いったん舞台とかに出ちゃうと、そういう子（ファン）がついてくる場合が、たまにある。現役時代の感覚とかでいっちゃうと、なんともいえない空気になる…（笑）

Ａさんの語りからは、男子新体操選手は「タレント」とは質的に異なる存在であるからこそ、直接の交流が選手と観客の間で可能になっている、という理解が読み取れる。冒頭に述べたように、また次節でも検討するように、男子新体操は身体表現あるいは身体芸術としての側面も多分に持っている。しかし、現行の制度内で行われる演技の多くは、あくまでも競技の範疇にあるものであり、入場料が発生する場合でも商業的に行われているわけではない。一方、社会人選手として活躍する道がほとんどないために、トップレベルの選手は大学卒業後にパフォーマンス集団などに所属してパフォーミング・アートの世界で活躍する、というキャリアの移

行が見られる場合がある。キャリアの移行によって、「選手」と「ファン」という関係は、「タレント（プロの表現者）」と「ファン」の関係に置き換えられることになる。この置き換えを行うのは、Aさんの語りから判断すれば、ファンや演技者／選手自身ではなく、その周囲にいるライトなファンたちである。Aさんなどのファン自身が、「選手」の演技を見ることと「タレント」の演技を見ることの間に意味の違いを感じているかどうかは、ここでは分からない。

次に、交流の内容に目を向けてみよう。選手などと交流される際には、どのようなことが話されているのか。皆さんは、演技の良かったところを伝えることを重視されているようだった。

B：彼らは、いわゆる自分の親と先生以外から感想を言われたことがないわけですよ。一般の関係のない人から、ほめられたことがない、ましてやけなされたことは一切ない、っていう人たちなので、他の人から「すごく良かった」とか言われたりすると、すごく喜ぶのね。

D：全日本選手権大会で優勝したことがある選手と岐阜で会ったんだけど、そのときに、「3 年前のときにとっても良かったですよ」って言ったときの、返事にびっくりしましたもん。僕に向かってですよ、言った言葉が「光栄です」（笑）おれは一体何者なんだ！？と思った（笑）

E：それも、深々お辞儀して。

D：そうそう（笑）だから本当に、おっしゃるとおりで、誉められ慣れてない。

B：親と先生以外…まあ先生は怒るだけですよね、親以外からたぶん誉められたことがない。で、こっちは、競技人口少ないから、やっててくれて、続けてくれてるだけでありがとうございます、みたいな気持ちがあって。でも、そういうこと、面と向かって言われることがない。いま、いくら Twitter とか Facebook があるって言っても、面と向かって言われることはないから。

A：なんか、自分にファンがいるって…

B：これっぽっちも思ってないの。一般の人が自分の演技を見たことがあるなんて、思ってないから。

C：なんか、順位が 10 位くらいだった人に声かけたら、「え、俺ですか！？」みたいな感じ（笑）1 位の人じゃないんですか、みたいな。

A：あるある、うん（笑）

B：「あなたの演技が好きなのよ」って言っても、「えー？」みたいな。

しかしこれは、その選手と個人的に友達になりたい、という気持ちとは異なるようである。座談会参加者の皆さんに、選手と友達になりたいと思うのか尋ねてみたところ、以下のように答えられた。

B：あたしは（思わ）ない。

A：なんか、つかず離れずで、友達まではいかなくていいんですけど、知人以上友人未満みたいなのが、いちばんベストな関係。顔は知ってる、名前も知ってる、普通におしゃべりしてる、でもお友達ではないですよ、っていう。なんか友達っていうのは、違うと思うんですよ。

D：そうだね。

A：でも、話せる関係ではあってほしいです。ずっとなんか壁があって、ファンなんです、一般なんです、舞台見てますー、みたいなのではなく。ていうのが、若干あたしの中では、ずっとあって。

ある程度までは近い関係でありたいものの、個人的な領域にまで関係が及ぶことは望まれていない。適度な距離感があり、かつ、男子新体操に関するトピックに限定して親しいやりとりが交わされる、というつながりが好ましいものとして感じられているようだ。

秦：普通に LINE で連絡取り合うとかは…

A：まあ LINE はアレですけど、Facebook は、わたしは現役辞めた子がほとんどなんですけど、何人かはつながっていて、でもしょっちゅうではなく、大会の前に激励のメールを送ったりとか、あと演技会の情報とかどうしても知りたいんで、「去年はこのぐらいにありましたけど、今年はないんですか」とかっていう情報収集

には使います。それ以外は…本当に、季節の挨拶とか、誕生日のお祝いとかぐらいで。身近な存在ではないので。大会のときに（自分自身も忙しくてメッセージを）書く時間もない、っていうのもあるんで。

Ｂ：次はいつどこで見られますか、みたいな、その情報収集をするためだったら選手でも指導者の方でも聞くし、それはFacebookでもTwitterでもいいんですけど…あんまりしないけど、それだったらあるかな。

前述のとおり、面と向かって演技を誉めることは良しとされているものの、それはウェブを介したこまごまとしたやりとりとは区別されているようである。

秦：「今日のは良かったよ！」とか、そういう連絡は…

Ｂ：しないしない。指導者側の方に「素敵でしたね」とは言うけど、選手には言わない。あ、年齢かもしれない。親御さんとか、先生たちの方が年代が近いので、お母さんたちとは普通にしゃべったり仲良しになったりとかしますけど、選手にはいかない。

Ａさんに比べると、Ｂさんは選手との距離をより遠く留められているように聞こえる。しかしそれは、むしろ選手との距離が近すぎるために、逆に選手との関わり方に迷っておられるようだった。

Ｂ：距離が近すぎて、距離感が分からないので、分からないときは近寄らないことにしよう、って。しかも、高校生とか中学生とか大学生とかの男の子に…なんて言ったらいい？

秦：確かに。近づこうと思えば、いくらでも近づけるけど…

Ｂ：けど、その距離感がわからないから近づかないから止めよう、って思ってから既に３年くらい経ってる。いまだに分かりません。

Ｄ：そうだね、わかんないね。

Ｂ：で、ママたちとしゃべっている方が楽しい。

Ｄ：確かにね、気が楽だよね、そっちの方がね。

Ｂ：先生たちとかコーチとか。

ただ「気が楽」というのは、若い選手たちの反応にとまどう、付き合いづらい、などの意味ではない。

Ｄ：応援したいっていうイメージなんだよね。さっきも言ったけども、まあ、モチベーション上げてほしいとか、「がんばってるね～！」みたいな形で、話しかけたりとかね。まあそれが度を越して、飲んだりとかするときもあるんだけど…でもあんまり「友達」っていうイメージは無いよね。畏れ多くて、友達になりたいな、ともあんまり思わないし。

Ｄさんのこの言葉からは、選手たちの能力などを賞賛し尊重しつつ、しかしご自身よりも年若い選手たちを見守り、やる気を引き出そう、というまなざしを読み取ることができる。ＡさんやＢさんも、選手たちを優れた演技者であり尊敬すべき相手として見つつ、年若い演技者を大人として見守ろうとされているように感じられる言葉を述べられていた。

Ｂ：学校の友達じゃないのよ、幼なじみじゃないのよ、あたしとあなたは、っていうのが、やっぱりベースにあるかな。

Ａ：うちらの距離感は、あれですよね、客席と舞台の上っていう。見えない壁があっての、距離感。

Ｂ：だって、話してくれている時間があるなら休んでていいからって。

Ａ：むしろ、あたしじゃなくて他の関係者のところに行ってくださいって。

Ｂ：営業に行ってください…

競技会時に会話をしたり、ちょっとしたメッセージをやりとりしたり、という交流は好ましいが、それはあくまでも良い演技を演じてもらうための励ましであり、自身が気を遣われたり個人的に親しい友人関係になったりすることは、応援の延長線上にはない、と考えられている様子が読み取れる。

なお、選手とのこうした関わりは、選手が男性であるから可能になるものと感じられている部分もある。そのことは、女子新体操選手に関して語られた以下の会話からうかがえる。

Ａ：女の子も厳しいんだけど、難しいんだけど。あ、この子の年代、よくわかんない、って。

Ｂ：確かに、女子とはしゃべれない…
Ａ：女の子の方が遠いんですよ、逆に。女子大生の女の子とか、女子高生の女の子。
Ｃ：まあ、わかるんですけどね。そういう感じだったな自分も、とか思うし。
Ｂ：でも新体操の男の子は礼儀正しいから、話しかければちゃんと、きっちり。「えー」みたいなこと言われないし、とりあえず。表立っては。

実際には、女子選手たちが礼儀正しくないということは決してないし、皆さんも、女子選手の態度が相対的に悪いという意味でこのように言われたのではない。思春期や大学生といった若い世代に接する際には、相手が異性である方が難しくない、という意味である。これもまた、競技人口の多寡によって関係の持ちやすさが変わるという問題同様、選手との距離の問題であるように思われる。つまり、観客から選手に話しかけ、直接の交流が行われるための条件の中に、自分以外にも他の「一般のファン」もいるという場の雰囲気や、女性の観客にとっては選手が異性であることで確保される一定の距離感が含まれているということである。この距離感を崩したくないからこそ、必要以上に個人的な話題を持ちかけることが忌避されているのかもしれない。

5　男子新体操の魅力

女性の観客に関しては、恋愛のメタファーを用いた自己語りがいくつか見られた。ひとつの象徴的な例が、男子新体操を知ったきっかけを語っていただいた際に、皆さんの口から出た冗談である。誰ともなく「きっかけ」を「なれそめ」と言い換えて、ひとりずつ「男子新体操とのなれそめ」を語る、という話の流れになったのだ。

Ｃさんは、「なれそめ」語りの中で、「もう本当に、落ちてしまって」「どうも（理由ははっきりしないがＩ高校を特別好きだ）」という言葉を使われていた。また同じ箇所で、このような会話もあった。
Ｂ：好きなところは、最初の５秒で分かるわけじゃないですか。音楽、クラシック聴きに行っても、頭の５秒、10 秒で。
Ｃ：全然別ものに見えてしまって。それは今でも変わってないです。それは上手く言葉では表現できないので、今こんなもん着てたりするんですけど（笑）（※I 高校のオリジナルＴシャツを見せてくださった）

またＡさんも、男子新体操の魅力について尋ねた際に、以下のように言われている。
Ａ：わたしは、言葉にすると、追いつかなくて。思っていることが全然。
Ｂ：だから、恋に落ちた瞬間があって、後から理由を付けているだけなんですよ。（※Ｂさん自身は男子新体操にしかない魅力があると考えられているわけではないため[10]、Ｂさんの語りは、Ａさんの気持ちを喩えで表現しようとされたもの）

ここで紹介したいくつかの表現を表面的に捉えると、まるで選手たちに恋愛感情を抱いているかのように聞こえてしまうかもしれない。しかしここで「恋」の対象になっているのは、選手個人ではなく、あくまでも男子新体操という競技そのものである。恋愛のメタファーが用いられる理由は、男子新体操がスポーツ競技として認識されるに留まらず、感性を強く刺激される身体表現として受容されていることに由来しているように思われる。

この点について考えるために、本節では、男子新体操にどのような魅力を感じているのか、男子新体操ならではの魅力というものがあるのか、という質問に対する回答を見てみたい。

前述した２の部分でも、動きの大きさや激しさ、変化の大きさを男子新体操の魅力として語ってくれたＤさんの言葉を紹介したが、Ｄさんはその際に、このようにも表現されていた。
Ｄ：新体操って、フィギュアスケートに似ているとか、シンクロに似てるとかっていうふうにいろいろ言われ

[10] Ｂさんは、同系統の表現の中で宝塚など好きなものがいくつもあり、男子新体操はあくまでも、「その中に一つ加わっただけ。だから、特別じゃないし、以下でも以上でもなくて、好きなものの中の１こ…ぐらい」、と言われていた。

るんだけど、やっぱり、僕たち人間ってさ、陸上の生物じゃないですか。氷の上とか水の中とは、（陸上で行われる男子新体操は）身体の使い方が全然違うんだなと。今になって（そう）思うんだけどね。

「全然違う」身体の使い方という表現の意味は、男子新体操の魅力を尋ねた際に説明されている。

Ｄ：コントラストですね。いろんなコントラストがあるんだけど、まず、高低差が違う。柔軟から始まって、組みからの跳躍がある。それから、動きもそうですね。タンブリングの素早い動きもあれば、静止があるじゃないですか、止まる。あれも（他の競技には）ない。動静感。あと身体。身体を全部使うものだから、動きがとにかく大きいんだよね。Ｏ君とか一番大きいと思うんだけども、とにかく可動域が広い。そこが僕は一番素晴らしい、（男子新体操）ならではじゃないかなっていうふうに思ってる。

Ｅさんは、Ｄさん同様に、動きの大きさや緩急の変化を魅力として語っている。また団体競技の動きの同時性も挙げられていた。

Ｅ：わたしは…なんか、見てて、気持ちいい。上挙（※技の呼称）ってすごいキレイだなって思ってて。伸びる限界以上に、またそこからさらに伸びてるところ。あれが、見ててすごく気持ちいい。体操の美しさっていうか。胸の開きとかかな、と思うんですけど、そういうのを見ているのが気持ちいい。あと、揃ってる、ていうのも気持ちいい。団体の鹿倒立（※技の通称）が、角度まで揃っていてぴゅって前転にいくのまで揃っているのが気持ちいいとか、あと三つバック（※団体の技の通称）の揃ってるのも、すごい気持ちいい。あとは、間（ま）です。決めポーズを決めたときの間とか、着地のときの、……っていう、間とか。動いてないときにも、きれい。あれってたぶん、「日本」だと思う。日本ならではだと思うんですけど。歌舞伎の見得を切るみたいな、ああいう間ですね。

一方Ｄさんは、上記とは異なる意味での「多様性」についても語られていた。

Ｄ：新体操で好きなのはやっぱり多様性なんですよね。とてもひとつの競技には見えなくて、みんな演技がバラバラなんですよ。これでよく同じ採点基準で採点するなあ、と思うぐらいバラバラなんだけど。

ここで言われる「多様性」「バラバラ」は、競技の中で求められている、演技内の「多様性」、すなわち演技の構成がバリエーションに富んでいる、という意味ではない。むろん、Ｅさんのいう動きのシンクロニシティと矛盾する話でもない。出場する団体や個人ごとに、演技がさまざまで、同一の基準で比較し序列化することが難しいように見える、という意味での、演技間の「多様性」のことである。このようにＤさんは、男子新体操の競技としての現在の方向性（規則、採点基準）に通じる側面も、競技のある意味での限界（採点が困難なまでに演技が多様であること）も、男子新体操の魅力として捉えられている。

こうした視点とは少し違う角度から語られたのがＡさんやＣさんである。ＡさんやＣさんにとって男子新体操を観ることは、ひとつの美的体験であるといえるかもしれない。

Ａ：なんか、あらためて見ると、なんで好きになったのかもイマイチよく分からない。たぶん、マッスル（ミュージカル）に出てたときに、その人の動きが一番きれいで、一番わたしのツボにはまったんだと思うんですよ。で、その子ばっかり。確かに華があったの、すごい華のある人だったんで。動きがきれいなのが好き。動きがきれいで手具（の使い方）がうまいのが、大好きです。

Ａさんは、動きのきれいさや手具の扱いのうまさ、という言葉にまとめながらも、「華」という言葉を選手の魅力を表現する言葉として選択されている。それは、以下の会話にあらわれる「キラキラ」や「オーラ」の話にも類似している。

Ｃ：（他の人の言っていることは）全部、そのとおりだって思えるんですけど、自分が感じていることが果たして言葉にできるかっていうと、到底追いつかない。強いて言えば、いま大好きなＩ高校の、Ｏ先生が、「選手が動いていると、なんかキラキラが見える」って言われたときに、「あ！これだ！」って思って。

Ａ：あー、わかるー。

Ｃ：あ、これ一番しっくりくる、って。

（一同、口々に何かを言う。筆者[秦]には、よく分からない）[11]
A：（筆者[秦]に向かって）いや、Dさんたちは知っているんですけど、K君が、N先生に、社会人大会に出るにあたってのアドバイスを聞いたら、「Kは上手いから、レインボーのオーラをもっと出した方がいいよ。おまえのは白いから」って言われて…なんだそれ、って思ったって（笑）。
E：で、N先生に「どうやったらレインボーオーラになるんですか」って聞いたら、N 先生は「う～ん。知らないっ！」って（笑）。
D：（笑）でもね、それ分かるよね。表現できないってやつか。
A：それを聞いたときに、友達と、「あ、わかる」っていう話をしてたんですよ。舞台に立ったときに、スポットライトが当たってなくても目立つ人と、どんなにメインを張ってても、影の薄いキャストさんとかいるじゃないですか。で、それの違いなんだろうなあって話をしてて。新体操とか見てても、うまいんだけどさあ、なんかちょっと…ていう子、けっこういるのは、きっとそのオーラのあるなしなんだろうなあって思って。

演技の「美しさ」は、競技規則の中でも何度も使用される言葉である。ただし競技としては、何が演技の「美しさ」かを予め決めることはできない。たとえば団体競技では「音楽のテーマと構成のメッセージを完璧に表現できていない」ことが減点対象となるが（2015 年版規則第 46 条）、使用される楽曲も、それにあわせた演技の構成も、演技ごとに異なる。ゆえに、その判断は規則として明文化されるのでは当然なく、審判員の見識に委ねられることとなっている。

では、審判員に依存した形で生成する、競技としての「美しさ」は、上記で言われる、指導者の言葉とされる「キラキラ」や「レインボーのオーラ」、そしてAさんのいう「オーラ」と同じものだろうか。同じかもしれないし、違うかもしれない。少なくとも観客は、それが審判の審美眼やその結論としての順位と一致するものとは考えていない。それが、前述した、順位は 10 位の選手に「（１位の選手ではなく）あなたの演技が好きなのよ」と伝える言葉にあらわれている。

それが技術的側面に反映されているはずだ、という見方もある。ＢさんやＤさんは、会話の別々の場面で、それぞれ以下のように言われていた。

B：でもそれ（※「オーラ」の話のこと）たぶん、具体的には、あと２ミリ手が伸びるとか、指先が、とか…

D：ほんのちょっとのことが伝わってくるんだよね。さっきね、２ミリって言ったけど、この２ミリの伸びが客席からでも分かるんですよ、顔の表情とかは分からないんだけど。

ただ、その場合も、それが競技としての採点結果と同一だと思われているわけではない。ＢさんやＤさんは、上のＤさんの発言に続いて、以下のようにも言われていた。
B：っていう思い込みの強い人たちなんですよ（笑）
D：（笑）でも伝わってくるよね（笑）
B：って自分で想像して楽しむの（笑）

ＢさんやＤさんにとって、審判員による評価の結果が、ご自身による演技の見方と一致しているかどうかは問題ではないように見受けられる。とくに、技術的価値、多様性、音楽と動きの関係、独創性などによって採点されるという競技の特性上、競技会での順位付けは観客にとって自明のものとはなりにくい。そのため、順位など以上に、「各自が演技の微細な差に気付く（あるいは、気付いたかのように思い込む）こと」を自覚的に楽しまれているのではないか。

---

11 実は「レインボーのオーラ」は、それを言った指導者の風変わりなキャラクターをよく表現しているエピソードとして知られているようだった。ただし、この指導者本人の記憶には残っていないので、このような会話が正確にこのまま交わされていたかどうかは不明である。

こうした、自身の審美眼に対する相対化・個人化された理解は、前述した「オーラ」に関する会話の中にも見られた。

Ａ：Ｋ君は、（全身を覆う衣装を着ていても）すぐに分かる。立ち姿、歩き姿がもう、Ｋ君をかたどっているんですよ。で、それがきっとオーラなんだろうなあって思って。

Ｂ：それ、ファンだからですよ。だって、あたしたちだって、フィギュアスケーターの影を見てても分かるもんね。これ誰、とか分かる。シルエットで。

Ａ：あ～わかる。（同行の友人に）あたしの友達にいるよね、指先だけで判断できる子とかさ（笑）ここしか出てない筋肉で分かる子とか（笑）

Ｂ：あー、そう。わかるわかる。

言葉に還元できない微細な差を理解しているような感覚や「好きな相手のことはわかる」感覚を持つこと自体が、男子新体操の一つの楽しみ方となっているのではないだろうか。

6　ファン仲間を増やすことについて

最後に、そうした楽しみを他の人に広めることなどに関する思いを見てみたい。まず皆さんは、男子新体操を知らない人に競技への関心を持ってもらうことは、簡単ではない、と考えておられるようだった。

Ａ：同じ、わかってくれる仲間うちしかムリだよね。初心者連れて行くのは、すっごいドキドキするもの。

秦：え、それはどうしてですか？

Ａ：自分はいいと思って勧めているけど、もしその子の趣味に合わなかったときに、その子の時間を削ってしまうっていう思いがあるから。なんか、感想を聞くのも怖くて。最初、彼女（同行の友人。この座談会にも、参加者ではないが臨席されていた）を誘うのも抵抗があって。でも、マッスルミュージカル好きなのも知ってたし、新体操のパフォーマーさんを好きなのも知ってたから、絶対にハマってくれる、っていう確信を持って。でも今でも、全日本３日間を誘うのはキツくって。まあ、金銭的にとか、遠いとかってのもあるんですけど。ちょっと、ハマってくれる要素がないと、誘いづらいですね、やっぱり。全くのノーマークの子を誘うのは、だからわたしはムリ。

Ｂ：わたしは DVD をちょっと見せたりとかして、とりあえず興味を持たせて。あとフィギュアスケートファンの子に、ちょっと「行く？」って。

Ｃ：落ちそうな人って、だいたい分かりますよね（笑）。

Ｂ：下地つくりますよね。

Ａ：そうじゃないと、ムリですよね。まったくそっち系の興味がない子に、「行こう」って言っても、まず「え～！？」って言われるのがオチだし。

Ｄ：そーだよね。

Ａ：「行ってもいいかな」って言ってくれて、行ったときに、なんか「そうでも（なかった）」って言われたときの自分のショックさ加減が…（笑）だから、根回ししてからですね、わたしは。

Ｃ：今は YOUTUBE とかあるから、ちょっと見てみて、って感じで反応見てから。

Ａ：テレビで盛り上がった瞬間に誘ったりとかね。

秦：じゃあ、誘ってみたけど、あんまり…みたいな反応をされることもあるんですか？

Ｄ：いやあ、そんなことしょっちゅうだよね。

自分の好きなものを勧めることが相手の迷惑になってしまったら困る、という配慮や、気に入ってもらえなかったときにがっかりする、という予測から、慎重に紹介されているようである。ただＥさんは、住まいの近くで開催される競技会には気軽に人を誘われている、という話もされていたので、皆さんが他の人を誘うのに必ずしも躊躇しているだけとは限らない。

Ｄさんは「フォロワー」が増えることを期待されている。

D：新体操に必要なのは、やっぱり、フォロワー。どう見たって新体操っていう競技は、（メジャーな競技になるための）必要なもの全部そろっていると思っているんですよ。競技レベルも高いし。だから、（観客を増やすような）はたらきかけとかを、もうちょっと上手くやればいいのにな、と思って見てる。あとはやっぱり、いろんなところ（団体）の、個々の地盤がすごく強いじゃないですか。それをまとめるリーダーとフォロワーがいるといいなって思いますね。そうすると、もう少し統一感が出てくるのかなあとか。

この発言には、単に観客やファンを増やすということに留まらない、組織のあり方に対する問題意識が見てとれる。これに続けて、Dさんはこのようにも言われていた。

D：組織がまだまだ脆弱なんだよね、新体操って。ほんと、戦国時代のように思える。いろんな国々に武将がいてっていう、安土桃山時代みたいな。個々にみなさん、自主独立で自活して活躍できるものだから、情報が中央の司令塔に集まらないんだよね。

こうした意識が、前述したとおり、Dさんの、特定の選手や団体ではなく競技全体のファンとして情報発信者になる、という役割の出発点になっている。またDさんは情報発信だけでなく、男子新体操全体の応援のためのポロシャツ制作（個人の資金によって 100 枚程度を制作し、ファンや選手に無償で配付）や、競技会の順位とは独立したファン投票（競技会ごとに、観客に選手の良かったところなどのコメントを書いてもらい、選手に渡す）などの自主的な企画も行われているとのことだった。個人的な活動として行われているために、時には運営側から中止を迫られることもあるようだが、様子を見ながら実施されているそうだ。

D：（ある競技会では）注意されて止めちゃいました。

秦：もったいないですね。

D：いやまあ別に…どこまでやっていいかわかんないんで。それを聞くと、答える方が可哀想じゃないですか。いいって言うにしろ、悪いって言うにしろ。だから、やれるところまでやって、ダメだって言われたらそこが限度なんだなって思うのが一番いいかなと思って。勝手にやったら、「全く～」って言われるだけなので。

秦：最初に聞いちゃうと、なんだかんだでダメっていう方向に働くような気がしますね。

D：まあ、ダメになるかもしれないし、それに聞かれた人が可哀想かなって。きっとその人が矢面に立つことになるじゃないですか。なんにも聞かずにやれば、「勝手にやりやがって」で済むんでね。それがいいかなと思って。「あ、ここはやりすぎなのか」ってことが、やっと分かったっていうね（笑）。でも［※別の競技会］のときは OK でしたからね。

Dさんがこの企画を立ち上げた際には、選手への助成なども考えられていたようである。企業からのスポンサードなどを見込めることもほとんどなく、特殊なフロアマットが必要であるなどの事情から活動の場も非常に確保しにくいため、男子新体操選手は学校の卒業時点で競技から引退せざるを得ないのが現状だからである。

秦：１位になったらどうなるんですか？

D：賞状あげましたよ。ほんとはいろいろ思ったんだよ、奨学金じゃないけどさ、［※競技会に出場するための交通費などを助成する］とかいうのをやろうかなと思ったんだけど、もらう方がまた今度可哀想かな、とかいろいろ思って、とりあえず選手にはお金を渡さずに、名誉だけで、「おめでとう！」ってやったんだけど。ちょっとね、どこまでやっていいかわかんないんでね。

秦：投票が無事に出来て、１位が決まったときの、賞状ってどういうタイミングで渡されるんですか？

D：大変でしたよねー。勝手にやってるだけだから、全然セッティングは間に合わず。大会後の、帰り際のドタバタの中で、見かけた人を個別につかまえて、大々的にやりました（笑）

A：自由なんですよ基本的に、［※競技会名］とかって。選手も自由だし、運営も自由だし、お客さんも自由なんで。もう終わったらバーって帰っちゃうのを、一生懸命つかまえるっていう（笑）

こうしたDさんの企画は、競技の振興だけでなく、選手に観客の反応を伝えるという意味もある。

E：投票用紙に名前書くだけじゃなくって、なんか「ここが良かった」とか感想を必ず入れてくださいっていう、そのコメントを届けたかった。

D：ああ、それはあるね。

これは前述したとおり、感想を伝えることが選手の動機付けにつながる、という思いからである。競技を広めたり、選手を励ましたりするための、Dさんを中心としたこうした活動については、今回はこれ以上尋ねることが出来なかった。こうした活動はDさんが個人的に実施されているものも多いようなので、これはDさん個人へのインタビューなどで改めてお話をうかがってみたいと思う。

おわりに

本稿は、男子新体操に全く無関係かつ無知な筆頭著者と、男子新体操の指導者である共著者によって書かれた。筆者らのポジショニングを明らかにするためにも、本稿の位置付けについて改めて述べておきたい。

冒頭に述べたように、本稿は男子新体操のファンを自認する人々が、どのようにしてこの競技／表現を楽しんでおられるのかを知りたい、という動機から行った座談会の記録をまとめたものである。そのため、指導者としての立場からは異論がある箇所についても、それを言及することは控えた。本稿の中で紹介した、いくつかの論点には、選手や指導者、保護者などの視点から見た場合には異なった見解が得られるだろう部分が含まれている。とくに、選手・指導者・保護者とファンの関係については、ファンだけでなく選手や指導者などの側の認識や感情をあわせて考察しなければ、そこで行われている相互行為を把握することは当然できない。そのため本稿は、あくまでも「男子新体操の社会学に向けて」書かれたもので、男子新体操界を「観客の語りから見」たものである。男子新体操界のあり方について考察することは、今後の課題である。

また、ファンの視点から書いたといっても、座談会参加者の皆さんや男子新体操ファンの方々の思いを本稿が十分にすくい取っているわけではないことにも留意されたい。今回の座談会に参加してくださった方々とは全く異なる仕方で男子新体操を応援されている「一般のファン」もおられるだろうし、本稿の筆頭著者のように自分の学生だったら応援する、あるいは、自分の友達／同級生／先輩／後輩／親戚／同郷の人…だったら応援する、という、競技のファンではないが特定の団体や選手の応援はしているという意味での「一般のファン」もいるだろう。本稿は、そういった多様な立場からのファン行為を代表するものとして書かれたわけではない。

加えて、とくに筆頭著者には、記録をしていながらよく理解できていないところもある。たとえば、なぜ座談会参加者の皆さんが選手や指導者と直接の交流が持てることを大切にされながら、しかし「客席と舞台の上」の関係であることがベストであり、その距離感を崩したくないと考えておられるのか、正直いうと実はよく分からない。この関係が崩れることで生じる不都合は、何だろうか。これは、たんに筆頭著者に誰かのファンになるという経験が不足しているという問題かもしれない（あるいは、筆頭著者の人間関係に対する理解が単純すぎることを示しているのかもしれない）。しかしいずれにせよ、こうしたことも含め、ファン行動を理解するという点でも本稿は不十分なものであり、調査や考察は今後の課題として進めたいと思う。

【参考文献】

浦谷郁子、2014、「新体操と芸術の関係における一考察――目的的スポーツと美的スポーツの区別の過ちについて」『日本体育大学スポーツ科学研究』3、1-9

日本体操協会編集発行、2006・2015、『新体操男子規則』

渡部愛都子、2009、『新体操はスポーツか芸術か』幻冬舎ルネッサンス